

2011年度中部支部例会報告

片山 高嶺

中部支部が新体制（支部長：本多裕之・名古屋大学教授）となって初めての支部例会が、8月2日に名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリーにおいて開催された。中部支部では支部例会を二つの枠組みとして捉えており、一つはラボスタッフ（大学教員）の研究心を刺激するための場として、もう一つは、若手研究者（博士後期課程修了間近の学生および博士研究員）の育成の場としてである。今回、前者としては二件：岩橋均・岐阜大学教授による「環境ストレス応答の網羅的解析：酵母からヒトまで」および朴龍洙・静岡大学教授による「カイコ発現系によるウイルス様粒子の発現と応用」、後者としては七件：熊谷明夫氏・信州大学による「酢酸菌 *Asaia bogorensis* による微細セルロースの生成」、Joni PRASETYO氏・静岡大学による「Bio-refinery of untreated paper sludge using cellulase produced by *Acremonium cellulolyticus*」、Peter HUGHES氏・University of Central Lancashireによる「An investigation into marine bio-fouling and its influence on the durability of concrete sea defences」、児玉翔太郎氏・三重大学による「複合能力を有する酵母を使用した実用的なバイオエタノール生産に関する研究」、山口敬史氏・名古屋大学による「ポリコム蛋白質が遺伝子発現を活性化する」、安川和志氏・富山県立大学による「A new method of chiral α -amino acid synthesis from α -aminonitrile by dynamic kinetic resolution」、および石川聖人氏・名古屋大学による「接着性バクテリオナノファイバー蛋白質による有用微生物の固定化」の発表が行われた。

ところで、今回の例会の開催前にビッグニュースが舞い込んできた。基調講演をお願いしていた富山県立大学の浅野泰久先生が紫綬褒章を受章されたのである。現役の教授として活躍されている浅野先生のご受賞は、中部

支部としてこの上ない喜びであり、急きょ、受賞記念講演としてご講演いただいた(写真1)。浅野先生の学問としてのご業績については私がいまさら紹介するまでもないが、私見として敢えて触れさせていただくとしたら、北陸という地域にバイオ研究（いわゆる生物工学や農芸化学的な）を根付かせたことも、その大きなご業績であると思う。実は、三年前から北陸三県のバイオ関連研究者が年に一度、一堂に会してシンポジウムを開催しているが（このシンポジウムについても、機会があればBranch Spiritで紹介させていただきます）、その会議の冒頭で浅野先生が、二十年前に富山に赴任したときにはこんなシンポジウムが開催できるとは想像だにできなかったと仰っておられたのを記憶している。北陸は高峰謙吉博士を生んだ土地でもあり、その素養はあったのかもしれないが、現代における北陸バイオ拠点の形成には、浅野先生のご尽力が非常に大きいことは疑いようがない。

さて、話を支部例会に戻して、今年から、「若手研究者の育成」のために、優れた発表をした若手に支部長賞を授与することになった。これは、高見澤一裕前支部長（岐阜大学教授）の任期時から検討してきたことであり、今回、実現へとこぎつけた。審査は参加した支部幹事の投票によって行われ、記念すべき第一回支部長賞は安川和志氏および石川聖人氏に贈られた。今回受賞を受けたのは、論文としてほぼ完成形に近い（あるいは、すでに論文になっているかもしれない）内容の発表であった。だから、惜しくも選考からはずれた学生諸君には、自分の発表が受賞対象にならなかったからといって、決して悲観しないで欲しい。これからきっと新しい発見や展開があるはずだから。

当日は、原島俊新会長（大阪大学教授）もわざわざ支部例会のために大阪からご参加いただき、開会のご挨拶をいただいたうえに懇親会にまでご参加いただいた(写真2)。

中部支部新体制の試金石であった支部例会は、若手講演者の熱意もあって、盛会のうちに終了した。すでに、来年の支部例会に参加するのが楽しみであり、そう思っているのは私だけではないと思う。全国の皆さん、一度、中部支部例会を覗いてみてはいかがでしょうか。



写真1. 浅野先生による記念講演



写真2. 講演者全員が原島会長を囲んで記念撮影